

# 『現代人間学・人間存在論研究』第一期を終えるにあたって

著者	上柿 崇英
引用	現代人間学 人間存在論研究. 2020, 1 (4), P.445-447
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10466/00017209">http://hdl.handle.net/10466/00017209</a>

## 『現代人間学・人間存在論研究』第一期を終えるにあたって

遡れば、本誌の構想は二〇一〇年代初頭の頃からあった。当時筆者はある地方大学の任期付き講師であり、メンバーの増田敬祐はまだ大学院に在籍中であつた。二人はともに非文学部出身者として哲学／思想の業界に入ったものの、この国の人文科学に漂う閉塞感と無力さに憤り、時代や人間を捉える新しいアプローチを模索しようとしていた。私と増田は、このとき互いに新しい雑誌を創刊することを約束したのであり、それが形となつたのが本誌である（増田はその後、文芸誌『夜半』を創刊した）。

本誌の構想が具体化するのには、二〇一四年の暮れから二〇一五年の初頭にかけての頃であつた。このとき大阪府立大学内に「環境哲学・人間学研究所」の設置が決まり、また何よりもメンバーとして吉田健彦の参加が決まつたことが大きな意味を持つていた。何かを始めるためには拠点が必要であり、二人ではできないことであつても、三人いればできるといふことが無数にある。ここから三人は共同研究を開始し、そしてそれ以来多くの議論を重ねてきた。こうして、二〇一六年に『現代人間学・人間存在論研究』の第一号が刊行されたのである。

もつともこのとき三人の頭にあつたのは、さらに大きな構想であつた。それはメンバーが本誌を通

じてそれぞれに自らの〈思想〉を深化させ、四年間で第四号までを刊行した後、二〇二〇年を目処として、互いに成果を単著として出版すること、しかもそれを同じ出版社からシリーズ本として刊行するということであった。人文科学の界限では、権威に依存し、重箱の隅をつつくかのような「微細な研究」ばかりが溢れている。そのなかで徹底的にその人自身の〈思想〉を希求したものの、しかもそれが根底において問題意識を共有する「研究者集団」の成果という形で世に出されること。それが、このプロジェクトの真のゴールであった。

あれから五年、筆者らは何とかして第四号を刊行する地点にまで来た。この間、メンバーが身体を壊したり、さまざまな事情で執筆できない状況に置かれたりすることもあった。また出版に向けた準備を開始したものの、シリーズ本どころか、単著の刊行を引き受けてくれる出版社でさえなかなか見つからなかった。そして第四号自体も、完成までに二年がかかり、プロジェクトはさまざまな意味において綱渡りの状態にあったと言える。

しかしそうした困難にもかかわらず、この五年にわたる共同研究の成果は非常に実りの大きいものであった。おそらく第四号で書かれた内容は、筆者ら自身、第一号の執筆時点ではまるで想像していなかったものである。「現代人間学」に託してきたものの中身も明確になり、メンバーはそれぞれの形で既存の人間学的パラダイムを相対化する自身の立ち位置と、そこから見える新しい地平とを獲得することができたとと言える。それはこの五年間における最大の成果である。筆者はここで、互いの協

力によってこの地平にまで到達できたことを誇りに思うとともに、ともに歩んできた二人のメンバーに対して改めて感謝と敬意を表したい。この三人のうちたったひとりでも欠けていれば、われわれはおそらくいまでも五年前と同じ地点にいたことだろう。

本誌の「第一期」は、この第四号をもって終了となる。「第二期」では心を新たに、新メンバーを加えたり、これまで踏み込んでこなかった新しいテーマに取り組んだりもしていきたい。「現代人間学」を取り巻く諸問題について、初学者向けの入門書を刊行するという計画もある。またシリーズ本としての刊行は断念したが、これまでの成果をメンバー全員がそれぞれ単著として刊行するまでは、本当の意味において「第一期」が終了したことにはならないだろう。やるべきことは、まだまだ終わっていない。

編集代表 上柿崇英